

研究テーマ	感性や想像力を働かせながら、対象の見方や感じ方を広げることができる指導の在り方 —第1学年「見て、感じて、考えよう」～ゴッホの作品から～の実践を通して—
-------	---

ひたちなか市立勝田第二中学校 教諭 大村健太郎

I 研究テーマについて

中学校学習指導要領解説美術編によれば、第1学年の鑑賞活動においては、自然の造形や美術作品などに素直に向き合い、感性や想像力を働かせてそのよさや美しさを楽しみ味わいながら、美術特有の表現の素晴らしさなどを感じ取らせたり美術文化への関心を高めたりすることをねらいとしている。そのために指導する事項は、B鑑賞の内容(1)のア『造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と表現の工夫、美と機能性の調和、生活における美術の働きなどを感じ取り、作品などに対する思いや考えを説明し合うなどして、対象の見方や感じ方を広げること。』とある。

本研究のテーマである「感性や想像力を働かせる」ために、まずは作品を「見る」「感じる」プロセスを大切にしたいと考えた。作品をただ漫然と見るのではなく、形、色彩、表現方法など、見るための視点を明確に提示することで、作品に主体的に関わることができるだろう。そうして読み取った内容を思考の材料として、自分自身の考えをもたせたい。それらを言葉で考え整理することで、美しさの要素が明確となり、見方や感じ方も広がるであろう。また、他者と意見を交流する(説明し合う)ことにより、自分一人では気付かなかった価値などに気付かせたい。

以上のことから、生徒が「見る」「感じる」「(言葉で)考える」活動を通し、感性や想像力を働かせながら対象の見方や感じ方を広げることができる指導の在り方について研究するため、ゴッホの作品を題材に授業を実践した。

II 研究の実際

1 題材名 「見て、感じて、考えよう」～ゴッホの作品から～

2 題材の目標

- 作品のよさや表現の工夫について主体的に見たり感じ取ったりすることができる。
(関心・意欲・態度)
- 作品に対する個々の思いや考えを、他者に意欲的に説明したり聞いたりすることができる。
(関心・意欲・態度)
- 感性や想像力を働かせながら、対象の見方や感じ方を広げることができる。(鑑賞の能力)

3 題材について

(1) 生徒の実態

本学級(33名)の生徒は、美術科の表現活動や鑑賞活動に熱心に取り組むことができる。鑑賞についてのアンケートの結果からは、約半数の生徒が、鑑賞の活動を「好き」「どちらかというところ好き」と答えている。理由としては、「友達の作品を見ることができるから」が最も多く、その他に「自分の知らない絵を見ることができるから」「外国の絵が好きだから」などがあった。小学校での鑑賞活動は、友達の作品を見合う“相互鑑賞”が多く、日本や諸外国の美術作品を見る活動よりも、友達の作品を見る活動というイメージが強いようであった。鑑賞の活動を「どちらかというところ嫌い」「嫌い」と答えた理由としては、「絵を描く(作る)ほうが好きだから」や「どんな

ことを書いたらよいか分からないから」「難しいから」などが見られた。

(男子17名 女子16名 計33名)

美術科(図画工作科)の鑑賞活動は好きですか。	主な理由
好き・・・・・・・・・・・・・・・・・・6名	・友達の作品を見ることができる ・外国の絵が好き
どちらかというとき好き・・・・・・・・10名	・自分の知らない作品を見ることができる ・自分の作品に生かせる
どちらでもない・・・・・・・・・・11名	
どちらかというとき嫌い・・・・・・・・4名	・絵を描く(作る)ほうが好き ・面白くない
嫌い・・・・・・・・・・・・・・・・・・2名	・どんなことを書いたらよいか分からない ・難しい

これらの結果より、色や形など作品を見る視点を明確にし、分かりやすい部分から作品に関わることで、誰にでも自分の考えをもてるようにさせたい。また、鑑賞が難しいものと考えている生徒に対しては、生徒同士が相互に説明し合う活動を通し、作品の見方や感じ方を広げることで鑑賞活動の楽しさに気付かせたい。

(2) 題材観

ゴッホは、1890年に37歳で自殺するまでに、約40枚あまりの自画像を描いたという。若い頃のかしこまった自画像。精神病を患い、自ら耳を切り落とした後の自画像。そして自殺する前年の自画像。それぞれが違った描かれ方をしており、自分の表現を求めようと工夫を重ねてきた過程が見て取れる。また、作品からは当時のゴッホの精神状態を想像することもできる。本題材では、ゴッホの描いた1枚の風景画と2枚の自画像を提示する。風景画は、1888年に描かれた「夜のカフェテラス」であり、教科書の表紙絵となっている。自画像は、1888年とその翌年にそれぞれ描かれたものであるが、生徒には制作年を明かさずに提示する。これら3枚の絵を比較し、表現上の共通点や相違点を見つけることで、風景画と同じ年に描かれた自画像を明らかにする。また、感性や想像力を働かせることで、当時のゴッホの心情に迫ることをねらいとしている。

(3) 指導観

本題材は、複数の作品を見比べることによりその共通点や相違点を見つけ、作者の工夫や心情について考えたり想像したりする「比較鑑賞」の活動である。生徒は作品に表れている形、色彩、表現方法などを手がかりにして、感性や想像力を働かせながら自分の考えを言葉で表現する。言葉にすることで、自分の考えが整理され、美しさの要素が明確になる。さらに、話し合い活動で他者と意見を交換することで、お互いの考えを深めることもできる。本時では、生徒一人一人が自分の考えをもち、話し合ったり説明し合ったりする活動を取り入れることで、作品に対する見方や感じ方を広げることができるよう指導していきたい。

4 題材の評価規準

関心・意欲・態度	鑑賞の能力
<p>作品に主体的に関わることで、表現の工夫や美しさの要素を進んで見つけようとする。</p> <p>自分の考えを意欲的に発表したり、友達の意見を自分の考えと比べながら聞いたりしようとする。</p>	<p>感性や想像力を働かせながら、対象の見方や感じ方を広げることができる。</p>

5 指導と評価の計画 (1時間取り扱い)

時	学習内容	評価規準・【評価方法】
1	ゴッホの絵画作品を鑑賞する。	表現の工夫や美しさの要素を進んで見つけることができる。 関【観察・ノート】
		自分の考えを意欲的に発表したり，友達の意見を自分の考えと比べながら聞いたりできる。 関【発表・観察】
		作品に対する自分なりの見方や感じ方を広げることができる。鑑【ノート】

6 指導の実際

(1) 授業の流れと時間配分


時間	めあて	形態	内容
3分	つかむ	個人	本時の学習課題をつかむ。
5分	知る	個人	作品や作者について知る。(経歴・制作年代など)
15分	見る 考える	個人	・形や色，モチーフなど作品に表現されているものを観察する。 ・作品の特徴や表現の工夫について考えたり，作者の心情について想像したりする。
10分	伝え合う	グループ	自分の思いや考えを説明したり，友達の意見を聞いたりする。
12分	広げる	全体	グループ毎の発表を聞き，見方や感じ方を広げる。
5分	ふり返る	個人	本時の活動をふり返り，感想を書く。

(2) 授業の展開

◇準備・資料

ゴッホの自画像のカラーコピー

◇展開

学習活動・内容	指導上の留意点・評価
<p>1 本時の学習課題を知る。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>ゴッホの作品を見て考えよう。</p> </div> <p>(1) ゴッホの簡単な経歴を知る。 (2) 教科書の表紙絵「夜のカフェテラス」を見て，自分なりの感想を持つ。</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・先入観をもたせないために，出身国や生没年等，必要最小限の情報だけを知らせる。 ・感想はノートに言葉で書かせる。 ・色彩や形，筆のタッチなどに目を向けさせる。 ・生徒それぞれの見方や感じ方を尊重し，様々な意見を認める。また，発表できたことを称賛し，意欲を高めさせる。

- 2 ゴッホの自画像2点を比較する。
- (1) それぞれの作品を見て、感じたことや気付いたことを発表する。
- (2) それぞれの作品の共通点や相違点について考える。



- 3 「夜のカフェテラス」と自画像2点を比較する。
- (1) 「夜のカフェテラス」と同時期に描かれた自画像はどちらか自分の考えをもつ。
- (2) グループで話し合い、それぞれの意見を伝え合う
- (3) グループ毎に発表する。

- 4 本時の活動を振り返る。
- ・本時の振り返りをノート（クロッキー帳）に書く。

評価（関心・意欲・態度）
それぞれの作品の共通点や相違点を意欲的に見つけようとしているか。

【観察・ノート】

- ・発表が少ない時は、列指名で発表させるなどして各自の考えを述べさせる。
- ・「夜のカフェテラス」と同様に、色彩や形、表現の工夫の工夫など比べる視点を与える。

- ・自分の考えを説明できるように、その理由について言葉で書かせる。
- ・友達の考えと自分の考えを比べながら聞き、自分と違った意見には相手を尊重した反応をするように指導する。

×「それは違うよ。」 ○「なるほど。」

評価（鑑賞の能力）
作品を観察・比較し、自分なりの見方や感じ方を広げることができたか。【ノート】

- ・時間があれば、本時の振り返りを発表させる。

III 研究の成果と課題

1 研究の成果

授業後に実施したアンケートより、ほとんどの生徒が進んで作品を見ることができたと回答していた。グループ学習を中心とした伝え合いの活動では、全員が知識の高まりを実感しており、同時に「見方」や「感じ方」も広まったと考えられる。事前アンケートでは、鑑賞活動を好意的にとらえていた生徒は16名であった。授業後は、鑑賞を楽しんだと感じた生徒が22名であり、今後、鑑賞活動が好きになる生徒の増加が期待できる。

(男子16名 女子16名 計32名)

○ すすんで作品を見ることができましたか。
できた・・・30名 あまりできなかった・・・1名 できなかった・・・1名
○ 自分の考えを書いたり発表したりできましたか。
できた・・・25名 あまりできなかった・・・5名 できなかった・・・2名
○ 友達の意見を聞いて勉強になりましたか。
なった・・・32名
○ 鑑賞の授業は楽しかったですか。
楽しかった・・・22名 どちらでもない・・・10名

2 今後の課題

本題材に限ったことではないが、鑑賞活動の課題の一つに評価の問題がある。生徒の「見方」や「感じ方」は数値化できないため、より客観性の高い評価規準が必要となる。本研究では、テーマに迫るために言語の活用を重視した。よって、生徒の考えはノート（クロッキー帳）に文字の形で残っており、評価材料として大変役に立った。本題材における評価の観点は「関心・意欲・態度」と「鑑賞の能力」の二つである。「関心・意欲・態度」は、生徒の活動の様子から見取ることができる。例えば、発表の回数や、話し合い活動での発言数などである。「鑑賞の能力」については、生徒の発言内容を評価することもできるが、授業での全ての発言を記録したり、記憶に留めたりしておくことは困難である。やはりノートの記録は、評価の材料として非常に有用である。次に、ノートの記録に対する評価規準をどのように定めるかであるが、一つは文字量が挙げられる。文字の多少は目に見える形で表れるので、評価を出す際の大まかな指標になる。二つ目は、作品に表れている表現の工夫などに、効果の説明がされているかである。例えば、「青色と黄色で塗り分けられている。」は表現の説明のみであるが、「青色と黄色で塗り分けられていて、二色の対比が際立っている。」は、効果の説明も加えているのでその分が加点となる。三つ目は、自分の思いが表現されているかである。「粗いタッチで描かれている。」と「粗タッチで描いたところに、作者の苦悩が感じられる。」ならば後者が高評価となる。ただし、全ての美術作品について上記の規準が当てはまるわけではない。同じ絵画でも具象画や抽象画など様々な種類が存在する。また、彫刻や工芸品、仏像や建築などの鑑賞となれば、絵画とは違った観点が必要となるだろう。これら様々な題材の評価規準を定めていくことが、今後の課題である。

(参考資料：生徒のノート)

